

ガム大学夏期語学研修と秋田県立大学の グローバル化への取り組み

高 階 悟

I. グローバル化への取り組み：秋田から世界へ

2014年元旦の秋田魁新報に「秋田から世界へ：広がるグローバル人材教育」の特集記事があった。この記事では、グローバル人材育成を目指す国際教養大学と秋田大学の取り組みが取り上げられていた。開学10周年を迎えた国際教養大学は、英語で授業を行っていることや1年間の海外留学の義務付けなどの独自の教育方針を持ち、海外提携校が44ヶ国・地域に158校ある実情が紹介されていた。国際教養大学の方針として、1年間の海外留学をする場合、1校に1名の派遣を目標にして世界中に提携校のネットワークを拡大しており、2014年11月現在の提携校は、167校であった。また、大学の教育理念として開学以来初代学長中嶋嶺雄氏の方針を受け継ぎ、幅広い教養を身につける「リベラルアーツ」の推進を特徴としてあげていた。国際教養大学は、2014年文科省が選ぶ全国37の国際競争力向上に貢献するスーパーグローバル大学の1校に採択された。国際教養大学は、約10年間で15億円の助成を受け、国際競争力の向上に取り組むであろう。

秋田大学は、海外で資源開発に携わる人材を育てる新学部「国際資源学部」(2014年4月開設)のカリキュラムが紹介されていた。秋田大学の特徴は、日本で最も伝統ある秋田鉱山専門学校(1910年)時代から培った採鉱や鉱山の学問の蓄積があり、国内外で活躍する人材を多数輩出し、アジア諸国からの留学生が多いことである。現在の秋田大学の海外協定校は、27ヶ国の51校である。

東北地方にある秋田は、日本で最もグローバル化(globalization)や国際化(internationalization)が遅れている地域と言われている。グローバル化とは何かと問えば、その正確な定義は難しい問題であるが、ここでは、国家を超えて人、モノ、カネが国境を自由に行き交う状況とする。秋田のグローバル化の遅れとして挙げられる例として、国境を超えるために必要な一般旅券(パスポート)の発行件数がある。一般旅券発行件数の全国1位は、東京都であり、秋田は全国43位(2012年)である。人口千人当たりの旅券保有率の全国1位は、38.3%で東京であり、秋田は12.6%(2006年)で46位である。なぜ秋田は、グローバル化や国際化に遅れているのであろうか。

その理由の一つは、秋田の主要産業が第一次産業の農業であるためであろう。戦後、日本は農業国から工業国へと変わり、第一次産業就業者は、いまや全国では4%に減少したが、秋田県では10%である。秋田は、グローバル人材よりもガラバゴス人材(孤立した環境で発展した人材)の方が多地域とも言える。秋田の特徴として、人口10万人あたりのお米の収穫量では全国1位(2008年)を占め、食糧の自給率は160%である。農業は、この大地を利用して作物を生産する地方産業であり、国境を越えて行き交う必要性の少ない、自然を相手にしたローカルな生産活動である。ちなみに、最もグローバル化の進んだ東京都の食糧自給率は1%である。秋田県がグローバル化や国際化に遅れている理由のもう一つの原因は、人口統計に現れている。

秋田県は、人口減少率が1.18%（2013年10月1日）と全国で最も高く、また老年人口（65歳以上）が31.6%（全国平均25%）と全国一である。ちなみに、東京都の老齢人口は、21.9%で全国46位であり、秋田とは全く正反対の現象が起きている。この秋田県と東京都の相違は、豊かな自然の中での生産活動の活発な田舎と人口過剰で経済活動の活発な都会と表現することもできる。そして、自然に囲まれて人口の少ない田舎は、都会に比べて経済活動におけるグローバル化への取り組みが遅れる傾向がある。

開学16周年を迎えた秋田県立大学は、システム科学技術部と生物資源科学部があり、「地域の知的拠点としての役割を果たす」ことを目的に設置された地方の公立大学である。秋田県立大学では、海外との学術的な交流は、工学系のシステム科学技術部では2002年よりアジアの大学と交流事業を実施してきた。生物資源科学部は、農業系・生物系の大学であり、大学教育におけるグローバル化という面から見ると、秋田県同様に取り組みが遅れている。秋田県立大学の海外協定校は、現在8ヶ国・地域の11校である。海外協定校の大部分は、農業の盛んな中国、韓国、タイなどアジアの地域にあり、唯一英語圏の大学として、カナダのゲルフ大学生物科学部がある。

秋田県立大学開学13年目の2011年から大学支援の英語圏での語学研修としてグアム大学夏期語学研修を実施している。グアム大学は、協定校ではないが、日本から距離的に近く、学生の経済的負担も少ない研修地として決定した。海外語学研修の目的は、学生の英語学習の意欲を高め、異文化交流体験を通じて広い視野で物事を考える力を身につけることである。次に、このような短期語学研修は、全国の国公私立大学の75%で実施していると言われているが、グアム大学夏期語学研修の特徴として次の3つをあげることができる。

第一に、この語学研修は、英語教育改善委員会の議論、学生への「語学研修アンケート」の実施後、英語力の向上と国際交流を目的として実施が認められた初めての全学的な海外研修である。そのため、夏期語学研修は、秋田県立大学の英語教育の延長線上にあり、英語教員が引

率教員として学生と一緒に語学研修に参加し、英語のプレゼンテーション等の指導を研修地で実施していることである。第二の特徴として、研修の詳細に関する企画は、大学の国際交流室や旅行業者が関わっているが、引率教員（ネイティブ・スピーカーと日本人教員）が主に担当している。グアム大学との研修内容や日程の調整、宿泊施設の手配、グアムでの学生の移動手段の確保などを引率教員がグアムと連絡をとって決定した。これに関しては、反対意見もあり、語学研修に関するすべてを業者に丸投げした方が良いと主張する教員もいる。第三の特徴は、グアム大学の語学研修の内容は、グアム大学の既成のプログラム EAP（English Adventure Program）に秋田県立大学独自の活動を追加したカスタマイズした研修である。グアム研修の目的は、学生が語学研修（EAP）を受けることによって英語力を向上させるだけでなく、グアムでのさまざまな体験を通して国際的な視野で物事を判断できる能力を身につけることである。そのために、グアム大学の講義の聴講、グアム大学のさまざまな施設見学、グアムの文化や歴史を学ぶツアー、パセオ公園クリーンアップ活動などを計画した。これらのカスタマイズした多様な内容には、研修前にグアム大学に要望した活動やグアムに行ってから臨機応変に決定した活動がある。それらのカスタマイズした活動は、地球規模で物事を考えるグローバル人材育成教育に寄与している。次に、2週間のグアム大学夏期語学研修の内容を紹介する。

II. グアム大学夏期語学研修2013年

グアム大学夏期語学研修2013年の内容を3つに分けることができる。第一は、英語力の向上のための EAP の講義や ESL（English as a Second Language）の授業、グアム大学の講義の聴講、グアム大学の施設見学などの活動である。2週間のグアム大学のプログラム中で、最も多かったのはグアムの文化と歴史、生物に関する講義であるが、最も印象に残っている活動は Conversation Partner である。Conversation Partner は、グアム大学の IFC（International Friendship Club）に所属する

学生1名と秋田県立大学の学生3～4人による2時間の双方向の教育活動であり、グループ学習またはピア・ラーニング (peer learning) とも言うことができる活動である。グアム大学の学生は "The goal is for your friend to practice speaking English." を心がけて趣味のこと、学生生活のこと、将来のこと、社会問題などの話題について県大の学生の英語に辛抱強く付き合っていた。教室内や芝生の上での学生同士の Conversation Partner 活動を通じて、県大の学生はグアム大学の学生と仲良くなり、英語力が向上し、さらにコミュニケーション力が向上したようである。グアム大学の IFC の学生は、最初の Welcoming Reception で顔合わせをし、さまざまな活動と一緒に参加し、われわれがグアムを離れる最後の日には、グアム空港まで9名の学生が見送りに来た。秋田県立大学の学生は、グアム滞在中、帰国後もフェイスブック (Facebook)、ツイッター (Twitter)、ライン (LINE) などを通じてグアム大学の学生と交流を継続しているようである。

第二は、グアムにおける異文化交流体験と戦争の歴史の学習である。グアム大学の語学研修の活動の中に、Chamorro Village Night Market, Cultural Beach Day, Cultural Dance, Historical Island Tour としてグアムの先住民のチャモロ文化を体験し、グアムの人々と交流し、グアムの戦争に関係した建造物や記念碑などを訪問した。その中で学生が最も楽しんだのは、一日中プライベートビーチでグアム大学の学生や職員と過ごした Cultural Beach Day のようである。グアム大学の職員が、椰子の実を割り、ココナツを取り出し、ココナツキャンディ作りを実演し、学生も椰子の実割りなどに挑戦していた。女性職員は、グアムの花プルメリアでレイの作り方を教えてくれた。昼には、浜辺でのバーベキューパーティのようにグアム大学の職員や学生と一緒にスペアリブやレッドライスなどを食べた。午後は、グアムの学生と一緒にバレーボール、バトミントンをしたり、プライベートビーチで泳いだり、ボートに乗ったりしていた。まさにリゾート地グアムの青い海と美しい砂浜を満喫した一日であった。

異文化交流体験でリゾート地としてのグアム

を体験すると同時に「戦争を埋め立てた楽園」グアムを理解するためにさまざまな戦争の記念建造物を訪問した。まず、「太平洋戦争国立歴史公園」(War in the Pacific National Historical Park) を訪問した。ここではアメリカ軍人の案内で、最初に「グアムのための戦い」のビデオを見せられた。このドキュメンタリー映画は、アメリカ軍が先住民のチャモロ民族のためにグアム島に上陸し、日本軍を追撃し、チャモロ民族を解放するための戦いの様子を描いていた。日本は、グアムを侵略し、チャモロ民族の文化を破壊し、チャモロ民族をジャングルの強制収容所に連行した邪悪な国家として描かれていた。この映画は、日本軍がグアムで惨敗し、アメリカ軍が日本本土を爆撃し、原子爆弾投下後の広島のコノコ雲で終わった。この戦闘で亡くなったアメリカの兵士1,769名を讃えるドキュメンタリー映画であった。グアム島北部には、第二次世界大戦中に日本本土爆撃のための B-29 爆撃機用の基地として作られたアンダーセン空軍基地 (Andersen Air Force Base) があり、太平洋戦争がアメリカの正義のための戦いとして、ビデオ、パネル、遺品、書籍などの展示で語られていた。

「占領とサバイバル」というタイトルのパネル展示物では、太平洋戦争が5つのカテゴリーに分けられ、それぞれが動画で語り継がれていた。「グアムでのサバイバル」では、日本軍の占領下でのチャモロ民族の苦しい生活、「グアムの占領」では日本軍の強引な占領の様子、「慰安婦」では約20万の女性が慰安婦として戦場に送られたこと、さらに「強制収容所の民間人たち」と「マネンガンの体験」では、「マネンガン強制収容所」の様子を描いていた。このパネルを見て、初めてグアムにチャモロ民族の「マネンガン強制収容所」があったことを知った。

グアムの「マネンガン強制収容所」は、第二次世界大戦中のユダヤ人を収容した非人道的な「アウシュビッツ収容所」や日系人を収容した人種差別的な「マンザナール収容所」のようなものなのか。グアム大学夏期語学研修後、グアムの歴史書を読み、「強制収容所」に関する記録を調べてみた。グアム大学の樋口和佳子教授の『日本の占領支配：1941-1944』(The

Japanese Administration of Guam, 1941-1944, 2013) によれば、1944年7月10日、アメリカ軍の海岸沿いへの爆撃が激しくなった時期に、日本軍は数千人のチャモロ民族の女性、子供、老人をジャングルのマネンガン「収容所」(camp) に避難 (evacuate) させたと記述していた。

On June 11, 1944, the U.S. military began aerial attacks. Between attacks, the crop cultivation unit carried out agricultural work, but nothing could be grown. After attacks from the sea and the sky for about 40 days, we were ordered by Headquarters to look for safe place for the security of noncombatants. Farm head Koshioka and I looked at a map and chose the upper reaches of the Irig River, and we went there on around July 17. The place [Manengon] was a palm tree forest about four kilometers from the river mouth. There was enough water, and the humidity was not high. We judged that the place was so wide as to be able to accommodate 15,000 people. We had to move the islanders in 12 villages in a short period and at night to that place. Most of them were women, children and elderly people, and we took great effort in moving them.

アメリカ人のローレンス・カニングハム (Lawrence J. Cunningham) の『グアムの歴史』(*A Complete History of Guam*, 2001) によれば、1944年7月10日、日本軍はグアムのすべてのチャモロ民族をマネンガンやタロフォなどの強制収容所 (concentration camp) に移動させ、そこでは食料も医薬品の提供もなかったとあった。この日米の戦闘に巻き込まれて700名のチャモロ民族が亡くなった。

On July 10 the Japanese began moving all of the Chamorros out of their villages and ranches. They forced them to march

to the interior of the island. No one could stop. Sick people died on the march to the camps. The Japanese placed everyone in concentration camps at Maimai, Tai, Manengon, Talofoto, and Malojloj. Soldiers surrounded the camps. The Chamorros build their shelters and latrines. The Japanese did not provide them with any food or medicine.

日本軍はグアムの先住民チャモロ民族を1944年7月10日にジャングルへ移動させた後、アメリカ軍と戦い、7月21日に敗北した。このマネンガンで起きた10日間前後の出来事は、それぞれの国民の戦争記憶から選び取られて「収容所」または「強制収容所」として語り継がれているようである。

次に、Historical Island Tour で、戦死した約20,000名の日本兵のために建てられた南太平洋戦没者慰霊公園 (South Pacific Memorial Park) や日本軍の防空壕などを見て回った。南太平洋慰霊公園の駐車場は未舗装で、訪問する日本人観光客もなく、公園を案内する人もいない、静寂に包まれた場所であった。平和寺、慰霊記念館、慰霊塔、日本軍飲料水槽を回り、一部の学生は、竹やぶの中にある小畑中将与60余名の日本兵が自決した薄暗い洞窟の前で手を合わせていた。

太平洋戦争を記念する2つの建造物を訪問して、戦争体験を語り継ぐことの難しさ、日米のそれぞれの国民の戦争記憶や歴史認識の相違を痛感した。学生は、この歴史を学ぶツアーから「グアムをリゾート地として知っていたが、ここで日本軍の激しい戦闘があったことを初めて知った」、また「日米の戦争記憶の溝」を感じたと報告書に書いていた。そして、その日米の溝を埋め、平和を達成するために、太平洋戦争の記憶を共有し、お互いの戦争体験を理解することの大切さを説いていた。

第三は、秋田県立大学の独自の活動としてパセオ公園クリーンアップ、グアム大学の学生へのインタビュー調査、英語プレゼンテーション、帰国後の報告会、そしてグループ研究課題報告、個人報告書の作成である。グアム研修後の報告

書から学生が最も印象に残った出来事は、持続可能な社会を目指す研究所（Center for Island Sustainability）の訪問であり、この研究所が企画した地元の人々が利用するパセオ公園の清掃活動に参加したことであった。この研究所は、99%のエネルギーを輸入、90%の食糧を輸入（日本はエネルギーの96%、食料の60%を輸入）しているグアムを持続可能な社会にするためにさまざまな研究活動をしていた。この研究所の屋根には発電のためのソーラーパネルがあり、強風の時には折りたたみ可能な風力発電用の風車があり、雨水を生活用水として利用するための大きなタンクがあり、食堂から出る廃棄物やキャンパス内の枯葉などからコンポストを作っていた。また、それらのコンポストを利用して野菜や果物を栽培し、ココナツに危害を加える外来種の昆虫駆除のための実験などをしていた。

パセオ公園クリーンアップ活動は、この研究所を訪問した時に決定した独自の活動である。この語学研修でお世話になったお返しに、何らかのボランティア活動を考えていた時にこのクリーンアップ活動を知った。この研究所の "Down to Recycle" の T シャツを着た職員と共にチャモロ・ビレッジに隣接したパセオ公園の清掃活動に参加した。パセオ公園内や海岸沿いには空き缶、ペットボトル、ビールの瓶、ガラスの破片、鉄くず、紙屑、プラスチックの食器類、衣服などがあり、ゴミの多さに驚きながら、約1時間ごみ袋にゴミを拾い集めた。その後、みんなでゴミの山から分解性のゴミ、再利用可能なゴミ、ガラスなどのゴミに分別した。このボランティア活動を通じて、学生はグアム社会のゴミ問題の深刻さを知り、資源の節約のためのリサイクルの大切さを知り、持続可能な社会のために一人一人が日常生活の中でできること身を以て体験した。

Ⅲ. グローバル人材（global citizen）の育成

文科省のグローバル人材の定義は、グローバル人材育成推進会議によれば、「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文

化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」である。文科省やグローバルに活躍する企業が求めているグローバル人材（global human resource or global professional）は、国際的な産業競争力の向上に貢献する人間である。スイスにある国際経営発達協会（IMD）が発表した世界競争力ランキングでは、アメリカが1位、中国21位、韓国22位で、日本は24位（2013年）である。文科省は、日本が資本主義社会において中国や韓国を上回る国際競争力をつけるためのさまざまな教育政策を打ち出している。2002年国際競争力のある大学づくりを推進するグローバル COE プログラム（Global Center of Excellent Program）の開始、2011年産学連携によるグローバル人材育成推進会議の設置、2014年国際的な産業競争力の向上を目指したスーパーグローバル大学創成支援事業などである。2014年の IMD の国際競争力ランキングでは、日本は21位、中国23位、韓国26位となり、日本は中国や韓国を追い越した。しかしながら、企業の生産拠点の海外移転や貿易自由化のような極端な経済のグローバル化政策は、地方産業の衰退を招く可能性がある。このような矛盾もあり、大学・短大などの教育機関でのグローバル化への取り組みには、地域や大学教育の理念ごとに温度差がある。

グアム大学夏期語学研修に参加した学生は、グアム大学での Conversation Partner 活動を通じてコミュニケーション能力と協調性を身につけ、異文化交流体験を通して視野を広め、戦争を語る建造物（アメリカの太平洋戦争国立歴史公園と日本の南太平洋戦没者慰霊公園など）の訪問を通じて平和の大切さを自覚し、グアムでのクリーンアップ活動のような社会活動を通じて持続可能な社会に向けて個々人に何ができるかを学んだと思う。秋田県立大学の語学研修は、世界が直面するさまざまな問題に向き合い、地球規模の問題解決に向けて行動できるグローバル人材（global citizen）の育成に寄与したといえる。

その成果は、帰国後の報告会での学生の口頭発表や『グアム大学夏期語学研修2013報告集』

の記述に表れている。学生20名の報告集のタイトルの中に「グアムでの成長」、「行動を起こすための勇気」、「大きな変化」、「自分変わったなぁ」、「飛び込もう」のように学生の成長の様子が窺える表現があった。具体的な考え方の変化として、「視野を広くすることができた」、「積極的に行動することの大切さを学んだ」、「自分の性格が大きく変わった」、「何かを変えようと必死に努力をした」、「社会に奉仕できることは何かを考えた」、「ゴミ問題について、現状を見たままにするのではなく、自分にできることをやってゆきたい」と書いた学生がいた。

秋田県立大学のグローバル人材の育成は、地域の知的拠点として地域の産業活動に貢献し、惑星としての地球環境の持続のために行動をする人間を育てることである。この考え方は、1960年代の地球環境運動のモットーと同じく持続可能な社会に向けて地球市民 (global citizen) として「地球規模で考え、足元から行動せよ」である。

Think Globally, Act Locally!

※ この論文はグローバル人材育成教育学会第2回全国大会（2014年11月16日、国際教養大学）で発表した原稿に加筆したものである。

参考文献

- 秋田県立大学 『グアム大学夏期語学研修2013 報告集』秋田県立大学, 2014.
- 「特集：グローバル人材の育成を考えるー日本におけるリメディアル教育から大学教育全体の視点までー」『リメディアル教育研究』第9巻第1号 2014.
- 加藤典洋 『人類が永遠に続くのではないとしたら』新潮社, 2014.
- 高階悟 「報告：グアム大学夏期語学研修」『秋田県立大学総合科学研修彙報第13号』秋田県立大学, 2012.
- 中嶋嶺雄 『学歴革命：国際教養大学の挑戦』KK ベストセラーズ, 2012.
- 水野和夫 『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書, 2014.
- 山口誠 『グアムと日本人：戦争を埋め立てた楽園』岩波新書, 2007.
- Lawrence J. Cunningham *A History of Guam*, Bess Press, Inc., 2001
- Wakako Higuchi *The Japanese Administration of Guam, 1941-1944* McFarland & Company, Inc., 2013
- Paul Carano, Pedro G. Sanchez *A Complete History of Guam*, Charles E. Tuttle Company, 1964
- You Tube で Akita Prefectural University で検索すると「グアム大学夏期語学研修2013」の動画（16分）で見ることができる。グアム大学の IFC の学生が録画したものである。